

サンゴの競争相手

- ウミトサカの仲間 -

あけましておめでとうございます。今年最初のアムスルだよりは、やっぱり干支の「とり」にちなんだ生き物にしようといういろいろ考えてみました。探してみると、鳥の名前のついた海の生き物はけっこうたくさんいてどれにしようか迷ったのですが、今回は、「ウミトサカ」という生き物を紹介します。

「ウミトサカ」は、にわとりのとさかに似たケイトウという花みいたいなので、その名がつけました。ウミトサカの仲間、つまりウミトサカ目に属する動物の中には、ウミイチゴやウミアザミなど植物の名前のついたものや、ウミキノコやウネタケのようにキノコにちなんだ名前をもつものもいます。いずれも岩に張り付いて移動しない様子や形の美しさ、おもしろさからつけられた名前でしょう。

ウミトサカの仲間は、時には1m以上の大きさに成長するものもいます。けれども、これは1匹のウミトサカではありません。1匹(1個虫)のウミトサカの大きさは、もっとも伸びる種類でもせいぜい長さ4cm程度で、多くは1cmにもなりま

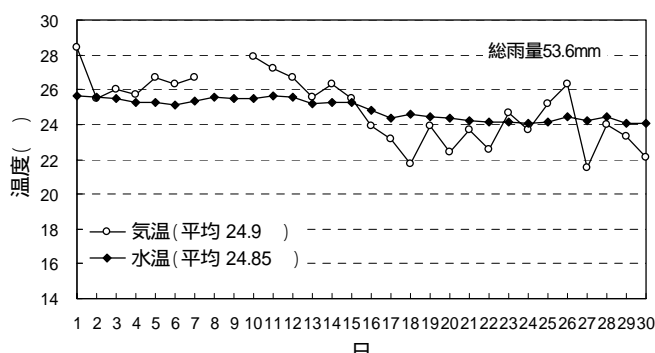
せん。直径は数mmです。この小さな個虫がたくさん集まって形作っているのが、海で見かけるウミトサカのひとかたまり(1群体)です。

岩に張り付いて移動しないところやたくさん個虫が集まって1群体を作って生活しているところなど、イシサンゴによく似ています。事実、ウミトサカの仲間は、イシサンゴと同じ刺胞動物の花虫類の仲間です。

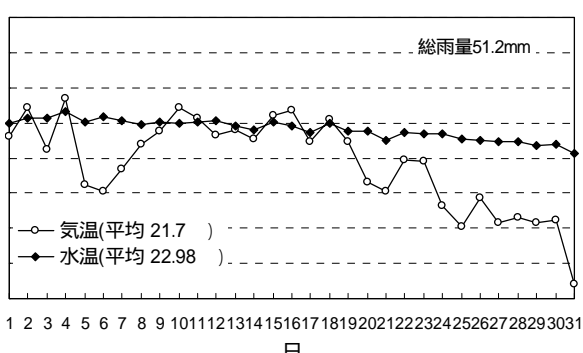
しかし、大きく違っているところもあります。まず、個虫の触手の数や形が違っています。ウミトサカの個虫もイシサンゴと同じで小さなイソギンチャクのような形をしていて、時に触手を伸ばしますが、その触手の数が、イシサンゴは6の倍数(つまり12本、24本など)なのに対して、ウミトサカはどれも8本です。そして、ウミトサカの触手には羽状の突起があり、そのため伸びた触手はちょうど広げた網のようで、餌となる小動物などを捕らえやすくなっています。2番目に違うのは、骨格です。イシサンゴが固い骨格を持っているのは、みなさんも知っているとおりで、ウミトサカにはこれがありません。ですから、イシサンゴと違って、さわると弾力があります。けれども、だからといって骨格が全くないわけではありません。実は、ウミトサカの仲間の体の中には、0.01~5mm程の小さな骨格(骨片といいますが)が、たくさんあります。そのおかげで、ウミトサカの仲間は、イシサンゴに比べて、ずいぶん

定点観測

2004年11月



2004年12月



大きく伸び縮みすることができ、柔軟性に富んでいます。

このように似ているけれども大きく違うウミトサカとイシサンゴですが、サンゴ礁のなかで生存競争をしていると考えられています。ウミトサカの中には、サンゴを殺してしまう化学物質を出すものがいるらしいのです。ですから、まともに勝負をするとサンゴが死んでしまい、ウミトサカが繁殖してしまうのです。しかし、ウミトサカは丈夫な骨格をもっていないので、強い波で壊されることが多く、台風などで猛烈な波の押し寄せるサンゴ礁の浅い場所では、丈夫なサンゴたちが生き残る、ということになります。実際の海でも、浅いところはイシサンゴが多く生息しているところは少なくありません。

慶良間からは、これまでに35種程のウミトサカの仲間が見つかっています。サンゴとの競争を考えると、あまり増えすぎるのも考えものですが、多くの生物が暮らすことは、見た目の美しさからもサンゴ礁の働きの上からも大切なことでしょう。そのためには、いろいろな環境が健康に保たれることが重要だと思います。今年も慶良間の海が、たくさんの命をたくむ豊かな場所であることを願っています。

阿嘉島の海より

1月3日(月)、阿嘉離島総合センターではお正月恒例の合同生年祝いが行われました。

今年阿嘉島でめでたくお祝いの年を迎えられた方は、

石川源助さん(85)、喜屋武文さん(85)、金城ヨシさん(85)、金城勇吉さん(73)、金城君子さん(73)、金城忠信さん(73)、の計6名でした。

そして島の内外から集まった子供、孫、親戚がこの日のために練習してきた数々の余興を披露しました。琉



球舞踊あり、民謡あり、獅子舞ありと沖縄らしい内容の余興が続くなか、島の子供達によるギター侍のオリジナルネタは会場を大いにわかせました。そして最後はやはり全員参加のカチャーシーで締めくくられました。島をあげての祝いの宴をみなさん存分に楽しんでい



るようでした。今回生年祝いを迎えられた方々にはこれからも末永く阿嘉島を見守っていただきたいと思います。

それでは今年も一年良い年でありますように。

